

一 次の①⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字で書きなさい。

- ① ユウシュウの美をかざる。      ② ヒカク製品を買う。      ③ 原料をカコウする。
- ④ お前の目はフシアナか。      ⑤ 不正のオウコウをゆるすな。

二 次の①⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで書きなさい。

- ① 服装を整える。      ② 申し出を断る。      ③ きつい口調で注意する。
- ④ タイムを計る。      ⑤ 他人を中傷する。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

動物たちの協業<sup>注1</sup>は、さまざまなコミュニケーションをつうじて遂行<sup>すいこう</sup>されている。エサを求めていつせいに巣から出発した働きバチは、蜜<sup>みつ</sup>をみつけると、まず上空にあがって「8」の字を描く<sup>えが</sup>ように旋回<sup>せんかい</sup>し続ける。すると付近を飛んでいた仲間のハチは、いつせいに8の字のパターンを描いて飛んでいるハチのところへ集まってくる。この場合、8の字のパターンは、「エサがここにある」ということを意味する記号<sup>①</sup>の役割を果たしており、そのメッセージを解読した仲間は、いちはやくエサのあるところに集まることによって、エサを探索<sup>たんさく</sup>する手間を大幅<sup>おほはば</sup>に短縮し、労働の効率をあげることになる。

これは、動物のあいだでのさまざまなコミュニケーションと、それにもとづく合目的<sup>注2</sup>な協業のほんの一例にすぎない。そのかぎりにおいて、記号を用いたコミュニケーションをつうじて協業<sup>注3</sup>するということは、なにも人類の専売特許<sup>せんばいとくしよ</sup>ではない。にもかかわらず、言語を用いた人間のコミュニケーションは、記号による動物のコミュニケーション<sup>④</sup>にはない重要な特質がある。

ミツバチは、蜜の存在に気づいたら、8の字の飛行をはじめ他はない。動物のコミュニケーションにあつては、ある対象(蜜)に接したことが原因となつて、その結果として必然的に、それを指示する記号の役割を果たす行動が生じる。そして、仲間のそうした行動に接したなら、そのことが原因となつて、それに反応する行動が生じる。ここには、飛んでいる虫が光源<sup>注4</sup>にむかつて旋回しながら近づいていくのと同様の、因果関係(原因と結果のつながり)があるにすぎない。

長い進化の過程で、かれらには、一定の対象を認知したら、ある定まった行動をするというプログラムがインストール<sup>注5</sup>されており、動物における記号的行動もまた、そうしたプログラムにしたがつて、いわば自動的に生じる。蜜が存在しないのに8の字の飛行をはじめたりすることはない。つまり、動物は、うそがつかない。この点で動物は、人間とは根本的に異なっている。

したがつてまた、動物の記号的なコミュニケーションにあつては、「相手の考え」、「相手の意図<sup>注6</sup>」という概念は登場しない。コミュニケーション

〈注〉 1 協業——仕事を分担して、組織的に働くこと。 2 合目的——ある物事がその目的になつていゝさま。  
3 専売特許——他人には売らせず、自分だけで売ることに対する公的な許可。 4 光源——光を発するみなもと。  
5 インストール——コンピュータに組み込んで実際に使えるようにすること。 6 概念——一般的な意味内容。

シヨンが、記号の役割をになう行動と、それへの反応とのあいだの因果関係によって成り立っているかぎり、そこには、そのように体を動かした相手の思いや意図を推測する、というプロセスが介在する余地はない。この点でもまた、動物のコミュニケーションは、人間のコミュニケーションとは根本的に異なっている。

そもそも動物の記号は、語を組み合わせた文ではない。なるほど、「文」という概念を使って説明するなら、ミツバチの8の字飛行という記号は、「蜜がここにある」という文を省略した一語文であり、群のはしにいる個体が発する天敵の警戒記号は「敵が接近中だ」という一語文とみなすこともできる。しかし、動物のコミュニケーションで用いられる記号は、パーツを組み合わせで作られた文ではないし、また記号をさらに組み合わせ、新たな記号列が作られることもない(ただし、ごく少数の類人猿は、初歩的なこうした記号操作を行っているようだが、ここでは立ち入らない)。

ところが人間の言語は、そうではない。なるほど、「テキ」という語は、敵を指示しはする。しかし、たんに「テキ」と呟いただけでは、いまだ確定した意味をもちえない。「いる／いない」、「来る／来ない」、「多い／少ない」という別の語(述語)と組み合わせられて文が形作られたとき、「テキ」という語は、はじめて確定した意味をもつ。すなわち人間の言葉は、文というまとまりの中で、はじめて確定的な意味をもつ。

しかるに文というまとまりは、人間の言語においては、語を自由に組み合わせ、任意の文を作ることができる。その結果、実際には起きていないことを述べる文も、つぎつぎに作ることができる。いま一頭の小ぶりの天敵が近づいている、としよう。このとき、「テキ、いない」、「テキ、多い」、「テキ、大きい」といった多くの文は、すべて偽となる。これらの文は、目下の状況では偽である。しかし、私たちは、これらの文の意味を理解できる。それは他でもない、それらの文が真となるような状況を考えることができるからである。このように私たち人間は、語を自由に組み合わせ、任意の文を作りうるがゆえに、実際には起きていないことについて考えることもできる。いや、考えざるをえないのである。「果実」という語と「木に生る」という語を組み合わせ、「果実が木に生る」という文を作れば、これは、われわれ

〔注〕7 プロセス——事が進んできた順序・過程。 8 介在——間に挟まって存在すること。 9 類人猿——ヒトに最も近いサル。  
10 任意——自分自身の判断で自由に決められること。 11 偽——いつわり。まちがひ。ここでは、〈夢〉の逆の意味。

の世界で真な文だが、「金」という語と組み合わせた「金が木に生る」という文は偽である。しかし、「金が木に生る」という文が意味をもつかぎり、「金の生る木」という語も意味をもつ。このように偽な文の意味を理解できるなら、「空飛ぶ馬」・「下半身が魚の女性」から「最大の素数」にいたるまで、実際にはないもの・ありえないものについて、私たちは語ることができ、そうした語りを理解することができる。

(大庭健「いま、働くということ」より。ただし、問題作成上、一部表現を改めた部分があります。)

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一 本文は、大きく四つのまとまりに分けることができます。では、その二番目のまとまりと三番目のまとまりはどこから始まりますか。それぞれ最初の4字を抜き出さないさい。

問二 —線部①〈記号〉と—線部②ヘメッセージとありますが、具体的にはどのようなことですか。それぞれ8字で、本文中より抜き出さないさい。

問三

——線部③〈記号を用いたコミュニケーションをつうじて協業する〉とありますが、〈動物〉が〈記号を用いたコミュニケーションをつうじて協業する〉ことで、どのような効果をあげることができるのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア エサの収穫量が増え、仲間の数が増える。

イ 脳の働きが発達し、人類に近い進化をとげる。

ウ 労働の無駄がなくなり、新しい行動が生まれる。

エ 作業の手間が大幅に減り、労働の効率があがる。

オ 個々の能力が上がり、より広い範囲でエサを探索できる。

問四

——線部④〈動物のコミュニケーション〉とありますが、その〈動物のコミュニケーション〉の特徴とはどのようなものですか。次の説明文の空欄にあてはまるように、本文中よりそれぞれ漢字2字で抜き出しなさい。

動物のコミュニケーションでは、一匹が、一定の対象を I し、ある決まった行動をとる。すると、仲間が、その行動に II する行動しかできない。そのため、動物は相手の考えを III するようなことはできない。

問五

——線部⑤〈たんに「テキ」と呟いただけでは、いまだ確定した意味をもちえない〉とありますが、では、〈人間の言語〉において、どうすれば意味を確定することができますか。本文中より4字で抜き出して答えなさい。

問六 筆者は、本文全体を通して、「人間のコミュニケーション」を、どのように結論つけていますか。それを「人間は、」につながるかたちで、25字以上35字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

シエルビーは誕生日の夜に友だちを呼んで、パーティをする計画を立てていました。ところが、おばあちゃんの具合が悪くなり、三十キロメートル離れたおばあちゃんの家にお母さんと看病をしに行くことになってしまいました。

翌朝、おばあちゃんはすこし具合がよくなったみたいで、起きてきて朝食を食べた。だけど、すぐに顔色が悪くなってきた。ママは、もつと休んでいるように、おばあちゃんにいった。

ベッドにもどるまえに、おばあちゃんは戸棚から包みを取りだして、あたしにくれた。

「たいしたものじゃないけど、誕生日プレゼントよ。パーティー、楽しみにしていたのにねえ。ごめんなさいね。」

包み紙には、古い折り目がたくさんついていて、おばあちゃんは、いつも包装紙をすてずにとっておいて、何度もくりかえしつかう。世界大恐慌の時代に育ったから、ものを大事にする習慣が身につけているのよ、とママがいつていたつけ。

でも、あたしは早く中身がみたくて、包み紙をびりびりやぶってしまった。これで、この紙はもうつかえなくなっちゃうわね、と思いがら。

カメラだった。でも新品じゃない。重たくて箱みたいにごつい、ぶかっような旧式カメラ。そこいらじゅう傷だらけで、おまけに、かどがいか所へこんでいる。むかしモーセが愛用していた、といっても通りそうなほど古くさい。あつけにとられてみつめていると、ママにつつかれた。

「ありがと、おばあちゃん。」

あたしは、いやみっぽくいった。

また、怒りがじわじわとこみあげてくる。おばあちゃんのせいで、バジャマパーティーがつぶれてしまったっていうのに、そのうえ、こ

〔注〕 1 世界大恐慌——一九二九年にアメリカで起こり、世界じゅうにひろまった経済危機。

2 モーセ——紀元前十四世紀ごろの、古代イスラエル民族の指導者。

んなおんぼろカメラがプレゼントだなんて、ひどい。自転車がもらえないって、はつきり決まったわけじゃないけど、むりみたいだし。そんなすごいプレゼントをくれるつもりだったら、ママがだまつてるわけがない。

あたしは、カメラをテーブルにらんぼうに置いた。そして、これ以上ママにおこられるようなことを口走らないうちに、庭にとびだした。ママが外まで追いかけてきた。

「ちよつと、シエルビー。なによ、その態度は。おばあちゃんに失礼じゃないの。」

あたしは、こぶしをにぎりしめた。ママに<sup>①</sup>あたしの気持ちなんか、わかりっこない。

「あんなおんぼろのカメラなんか、もらったってうれしくないもん。きつとこわれてて、写真なんかとれやしないんだから。」

「大事なものは、なにをもらったかじゃなくて、くださった人の気持ちでしょう。」

母親っていうのは、<sup>②</sup>いつだつてこう。きつとどこかに『母親のための参考書』かなんかがあって、子どもが大きくなるまえに一回は、いつておかなきゃならないことが書いてあるんだ。「野菜をのこしちやだめ」とか、「はさみを持ったまま走ってはいけません」とか、「いい返事ができないなら、だまつてなさい」とかね。

「あのカメラは、おばあちゃんにとって特別なもののなのよ。」

「あんなの、がらくたよ。すてるつもりでいたのを、くれたんだわ。」

あたしは頭にきていった。

ママはため息をついて、首をふった。

「ばかなことをいわないで。でも、そんなふうにしか思えないっていうのなら、外にいなさい。ちゃんと行儀よくできるまで、帰ってこなくていいから。」

ぜったいに、帰ってなんかやるもんか。夜までずっと外にいて、ママとおばあちゃんをうんと心配させてやる。そして、たのむからもどつ

てきてって、いわせてやるんだから。

午後じゅうずつと、あたしは、おばあちゃんの家まわりの畑や森をぶらぶら歩きまわった。はじめのうちは、探検ごっこも楽しかった。小川には、ビーバーがつくった小さなダムがたくさんあったし、畑のはずれでは、キツネの親子があそんでいた。牧場では、野イチゴをつんで食べた。けれども太陽がしずむころには、日に焼けて肌<sup>はだ</sup>がほてるし、のどはからから、おなかはずこべこになつてきた。

あたしが家にもどつてきても、おばあちゃん<sup>③</sup>は、カメラのことはひとこともいわなかった。ママはむりに明るくふるまって、何度もおしゃべりをはじめようとしたけれど、そのうちあきらめた。三人とも、へんにだまったまま、もくもくと夕食を食べた。

食事がおわると、ママはおばあちゃんにリビングルームでゆつくりするようにいって、自分はテーブルをかたづけた。

「ちよつと外の空気をすつてくるわ。ふたりきりのほうが、あやまりやすいでしょ。」

そうさやいてママがでていったあとも、あたしはぶすつとしたままだった。あやまらなきやいけないことなんて、なにもしてないもん。「シェルビー、廊下<sup>ろうか</sup>の物置にいつて、階段の下のところ<sup>④</sup>にしまつてある箱を持つてきてくれるかい？」

おばあちゃんが静かな声でいった。

あたしは気がすすまなかった。あの部屋にいくのは、気味が悪い。とくに夜は、いやだ。小さいころは、階段の下にこわいおばけがくれていると信じていたくらい。もう、おばけなんかいるとは思つてないけれど、暗くてせまい階段の下は、なんとなくこわい。

あたしは物置のドアをあけ、手探りして箱をみつけると、それを持って小走りでリビングルームにもどった。

「なにがはいつてるの？」

「アルバムよ。」

④あたしはため息をついた。やんなっちゃう。きのうの晩よりも、もつとたいくつなことになりそう。会ったこともない、とつくに死んでいる人たちの古い写真なんか、みたつてしょうがないのに。

でも、これ以上、おばあちゃんと気まづくなりたくなかった。持ってきた本もぜんぶ読んでしまったし、この家にはテレビもない。あるにはあるけど、室内用のアンテナを手で持つていないと、なんにも映らないうえに、やつと映った画面もぼやけてたりゆがんでたりで、人間と家具の区別もつかないんだから。

あたしは、ソファアにすわっているおばあちゃんのとなりにいった。

おばあちゃんは、一冊めのアルバムを手にとった。

「わたしが子どものときは、ちょうど大恐慌の時代だったの。」

おばあちゃんはアルバムをとじたまま、ひざにのせていた。

「あのころは、たくさんの人が仕事をなくして、みんなおなかをすかせていたわ。でも、うちには果樹園と菜園があったし、お母さん——あなたのひいおばあちゃんがニワトリを飼つていたおかげで、なんとか家族が食べていくことができたの。ただ、税金をはらうお金がなくてね。お父さんは農場を手放さなくてもすむように、カナダで木の切り出しの仕事をするに決めたのよ。何か月も、カナダにいったきりだったわ。」

⑤そうしたらね、お父さんがいないあいだ、お母さんが、いろんなものを写真にとつておきましようつていいだしたの。お父さんが帰ってきたとき、写真をみれば留守中のようなすがわかつて、うれしいんじゃないかって。お母さんは、コダック社のブローニー<sup>⑥</sup>つていう古い箱型カメラを持つていて、たまごを売ったお金でフィルムを買つてきたの。わたしたちは、思いついたものをかたづけしから写したわ。おばあさん牛のロージーから、ある晩風でたおれて、農場の荷車をべちゃんこにしちゃった木まで。そうやって夢中で写真をとつていっていると、時間が早くすぎて、さびしさがすこしはまぎれるような気がしたのよ。」

あたしは、だまって考えこんでいた。そしてテーブルのほうにいつて、置いてあったカメラを手にとると、おばあちゃんのところに持っていた。

「これが、そのカメラ？」

おばあちゃんはずいいた。

「家族みんなにとって、つらい時期だったけど、それなりに楽しかったわね。お父さんにあれをみせようとか、これをきかせようとか、いつもなにかしら考えていたし。それに子どもだったから、写真をとるだけでわくわくしたものよ。でも考えてみたら、いまどきの女の子は、こんなものほしがらないわね。ごめんさいね。」

「ひいおじいちゃんが帰ってきたときのこと、きかせて。」

おばあちゃんは、そのときのようなすを思いだして、目をきらきらさせた。

「それはもう、たいへんなさわざだったわ。みんなでお父さんにだきついて、いつせいにしゃべったり笑ったりした。お母さんは泣いていたし。お父さんは、子どもたちがあんまり大きくなったんで、ほんとうにびっくりしてたわ。そして何時間も、このアルバムをながめていた。みんな、すっかり写真をとるくせがしみついちゃって、お父さんが帰ってきたあとも、とりつづけてたのよ。」

⑥ おばあちゃんがアルバムをひらくと、どこかの家の庭でいすにすわっている男の人の写真があった。ひぎの上でブタをだいている。こんな大きなブタ、みたことない。

「すごい！ だれ、この人？」

「アーネスト兄さんよ。このブタは、エルマー。」

「どうして、ひぎの上にのせてるの？」

「さあ、どうしてかしらね。たぶん、友だちにみせびらかしたかったんじゃないかしら。」

おばあちゃんはページをめくった。

(中略)

「カラー写真はないの？」

「あなたの写真と、ハリエットの息子たちの写真だけね。わたしが子どものころは、カラーフィルムはなくて、写真といえば白黒だったのよ。でもね、この写真をながめていると、ひとつひとつの色が目にかんでくるわ。お父さんの髪かみの毛けは小麦色で、目はクルミみたいな茶色だった。サーカスごっこをしているわたしの上着は真っ赤。両親がバージニア姉さんあねさんに買ったんだけど、小さすぎて、とつておいたものなの。わたしは、いつもおさがりを着せられていたから、だれも着たことがない自分だけの服がうれしくてね。それに、この明るい赤は、いちばんすきな色なのよ。」

あたしとおばあちゃんは、すっかりアルバムに夢中になっていて、網戸あみどがパタンとしまる音にも気づかなかった。だから、ふいにママの声がしたときは、ふたりともぎくつとした。

「あら、なにしてるの？」

ママがたずねた。

「おばあちゃんの古い写真をみてるの。」

あたしはページをめくりながら、声をはずませた。

「ねえママ、みてよ。この写真、おばあちゃんのお兄さんのアーネストおじさんと、ブタのエルマーだつて。こんなばかどかいブタ、みたことある？ これは、ひいおじいちゃんが新しい車といっしょに写っている写真。それに、この馬の上に立っている女の子、だれだと思う？ おばあちゃんよ！ 信じられる？」

あたしの口から、いきおいよくことばがとびだしてくるのをきいて、おばあちゃんとママは顔をみあわせて、にっこりした。

あたしは、最後のページまでくると手をとめて、首をかしげた。背が高くてやせた男の人が、白い馬のとなりに立っている写真があった。

「この人、はじめてでてきたわ。」

「あなたのおじいちゃんよ。」

おばあちゃんはやさしい声で、すこし自慢げにいった。

「アーサーと会ったのは、わたしが十七歳のとき。ダンスパーティーでね。女の子たちはみんなアーサーに夢中で、なんとかして気をひこうとしていたわ。ダンスのお相手にえらばれたくてね。わたしはどうせだめだと思ってたから、コートかけの横にすわって、『嵐が丘』を読んだの。そのとき名前を呼ばれたので、顔をあげたら、まあ、アーサーが目まえに立っているじゃない。かれが手をさしだし、わたしはその手をとったの。」

おばあちゃんは、遠くをみつめるような目をしていた。

「四十二年間、いっしょに暮らしたわ。それなのに、アーサーの顔をみるたびに、あのさっそうとした十九歳の少年が重なってみえたものよ。フロアを横切ってわたしにダンスを申しこんだ、アーサーの姿がね。」

おばあちゃんは首を小さくふって、思い出の世界からもどってきた。

「おしゃべりすぎたわ。こんな話、たいくつだったでしょう。」

「ううん！」

あたしはあわてていった。

「なんだかおもしろいの。いままでは古い写真になんか、ちっとも興味なかったけど。もう死んじゃった人ばかりでしょ。でも、おばあちゃんの話を書いていると、いまでも生きているみたいな感じなの。」

おばあちゃんにはっこりした。

《注 3 『嵐が丘』——十九世紀のイギリスの作家のエミリー・ブロンテの小説。》

「うれしいわ。だって、みんなほんとうに生きていたのよ。すてきな人たちばかりだったし。シエルビーにも知ってほしいわ。」

「母さん、わたしも、もう一度話をききたいわ。」

ママがいった。

「ずっとまえから、いつかこの古い写真のコピーをとって、だれの写真なのか、いつの写真なのか、母さんに書いてもらうつもりだったのよ。」

「そうね、そのうち、ちゃんと整理しなきゃね。」

おばあちゃんがいった。

暖炉<sup>だんろ</sup>の上の棚<sup>なな</sup>の置き時計が、十時を打った。

「シエルビー、もうとっくに寝る時間よ。」

ママがやさしくいった。

「わたしも寝る時間だわ。」

おばあちゃんはアルバムをとじた。

「つづきは、またあたしにしましょう。」

あたしはカメラを手にとって、階段をのぼりはじめたけれど、すぐにひきかえして、おばあちゃんにだきついた。

⑦ 「ありがとう、おばあちゃん。このカメラ、たいせつにする。」

（ナタリー・キンシー・ワークス作 金原瑞人訳『スウィート・メモリーズ』より。ただし、問題作成上、一部表現を改めた部分があります。）

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一——線部①へあたしの気持ちとありますが、それを説明している一文を本文中から抜き出し、最初と最後の3字を答えなさい。

問二——線部②へいつだってこうとありますが、どういう意味ですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の感情を押し付け<sup>お</sup>けるばかりで、何も気づいていない。

イ ガミガミ頭<sup>がみ</sup>ごなしに言うばかりで、筋がまったく通っていない。

ウ 言っていることは正しいが、子どもの気持ちを考えていない。

エ あたりまえのことを言っているが、気持ちがこもっていない。

オ 人の目ばかり気にして、本当の気持ちをかくしている。

問三——線部③へおばあちゃんは、カメラのことはひとこともいわなかったとありますが、これは、へシェルビー<sup>お</sup>が怒ったので、へおば

あちゃんにとつて、そのカメラがどういうものかを、アルバムと共に伝えようと思ったからだと考えられます。では、そのことが分かるへおばあちゃんの言葉のうち、最初の一文を本文中から抜き出し、初めと終わりの3字をそれぞれ答えなさい。

問四——線部④へあたしはため息をついた。やんなっちゃう。きのうの晩よりも、もっとたいくつなことになるそう。会ったこともない、

とつくに死んでいる人たちの古い写真なんか、みたってしょうがないのにとありますが、最初はこのように考えていたへシェルビー<sup>お</sup>が、へおばあちゃんの話<sup>はなし</sup>を聞いて、すっかり変わってしまいます。では、その理由が明らかにされている一文を、本文中から抜き出し、最初の4字を答えなさい。

問五——線部⑤へお父さんがいないあいだ、お母さんが、いろんなものを写真にとつておきましようつていいたのとありますが、

この時のへおばあちゃん<sup>お</sup>の家族にとつて写真とはどのような意味を持っていたのでしょうか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 将来、孫たちに見せるために、撮<sup>と</sup>り続けなければいけないもの。

イ へお父さんに会えないあいだ、家族が暇<sup>ひま</sup>をつぶすもの。

ウ へおばあちゃん<sup>お</sup>とへシェルビー<sup>お</sup>の心をつないでくれるもの。

エ 離<sup>はな</sup>れ離<sup>はな</sup>れになっている家族を一つにつなげてくれるもの。

オ 子供同士で撮<sup>と</sup>りあうことによって、寂<sup>さび</sup>しさを埋<sup>う</sup>めてくれるもの。



問六 — 線部⑥へおばあちゃんがアルバムをひらくとありますが、アルバムを見ているうちに、ヘルピーとへおばあちゃんは、いつのまにか二人だけの世界に入り込んでしまっています。そのことが分かる、本文中の連続する二文を抜き出し、最初と最後の5字を答えなさい。

問七 — 線部⑦へありがとうございます。このカメラ、たいせつにするとありますが、へありがとうございます、おばあちゃんへこのカメラ、大切にすることは、それぞれヘルピーのどのような気持ちが込められていますか。本文全体の内容から考えて、40字〜50字以内で説明しなさい。

芝中学校 平成 22 年度入試（1 回）

試験問題の訂正について

【国語】

㊦ （誤） ㊸ 他人を中傷する。

（正） ㊹ 他人を中傷する。

# 国語試問解答用紙

平成二十二年  
度  
中学入  
試  
回

2

受験番号

一

|   |
|---|
| ① |
| ② |
| ③ |
| ④ |
| ⑤ |

二

|      |
|------|
| ①    |
| (える) |
| ②    |
| (る)  |
| ③    |
| ④    |
| (る)  |
| ⑤    |

三

|     |
|-----|
| 問一  |
| 二番目 |
| 三番目 |

|    |
|----|
| 問二 |
| ①  |
| ②  |

|     |
|-----|
| 問三  |
| 問四  |
| I   |
| II  |
| III |

|    |
|----|
| 問五 |
|----|

|      |
|------|
| 問六   |
| 人間は、 |

四

|    |
|----|
| 問一 |
| 問二 |

|    |
|----|
| 問三 |
| 問四 |

|    |
|----|
| 問五 |
| 問六 |

|    |
|----|
| 問七 |
|----|

25

35

50

40

号室

受験番号

氏名

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。